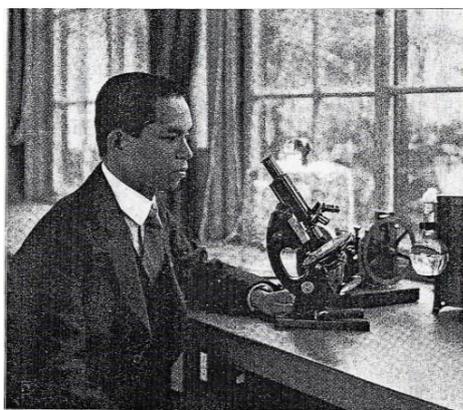


佐藤清明資料保存会会報

No.10



博物学者 佐藤清明 (1905-1998)

佐藤清明資料保存会
里庄町立図書館

2023.4.15

会報第10号 もくじ

1. あいさつ	佐藤清明資料保存会会長 加藤 泰久	1
2. 妖怪を描く — 佐藤清明の“記載論文”をビジュアル化する	越山 洋三	2
3. 福武教育文化振興財団助成事業 岡山大学構内‘菊桜’の新しい看板設置と‘菊桜’について	徳山 容	8
4. 福武教育文化振興財団助成事業 児童生徒対象冊子「佐藤清明ゆかりの菊桜」の概要（抜粋）		11
5. 高梁川流域自治体連携事業（里庄担当事業の記録）	小野 礼子	14
①動物妖怪展 at 里庄町立図書館		
②おはなし会「妖怪の世界～あなたのそばにいる・かも？」		
③特設コーナー 妖怪大集合 ～あやかしの世界へ ようこそ～		
6. 令和4年度の活動記録		18
7. 山陽新聞記事「岡山大学構内‘菊桜’の新しい看板設置と‘菊桜’について」		21
8. 編集後記		21

表紙写真：第六高等学校理科教室助手時代の佐藤清明（20代）

あいさつ

佐藤清明資料保存会会長 加藤 泰久

今年の春は、例年に比べ花粉が多く飛散するという報道がありました。3月に入ると、花粉症の症状に悩まされる人も増えているように思います。このことは、地球温暖化による影響かもしれません。清明先生は、このような地球環境の変化に何と言われるでしょうか。

さて、新型コロナウイルス感染症が国内で確認されてから、4年目を迎えました。3月13日からはマスクの着用についての緩和、5月8日からは感染症分類も2類から5類に引き下げられるなど、収束に向けて着実に進みつつあります。しかし、新型コロナウイルス感染症はパラダイムシフトとなり、人類は常に、目に見えないウイルスやトルコ、シリアの大地震のように、いつ発生するか分からない、疫病や災害の危険にさらされている事を忘れてはいけないという、警鐘になったと感じています。

令和4年度は、コロナ感染症の第7、第8波の中にあって、「清明を読む会」、「高梁川流域連盟自治体連携事業」、「里庄のせいめいさん展」等の事業を実施していただいた結果、多方面から清明先生の研究が深まったと感じています。また、菊桜育成保存会による冊子「佐藤清明ゆかりの『菊桜』」が発刊できましたことは、公益財団法人福武教育文化振興財団の支援、執筆や資料収集等にご協力を賜りました多数の方のお陰と感謝申し上げます。この冊子は町内小中学校に配布します。また、令和5年度には、令和6年度に岡山で開催される全国植樹祭記念として、幼稚園や学校等町内8か所に菊桜を植樹します。これらの事業を通じ、今後、学校や地域で、清明先生の研究を伝承していくとともに、菊桜の世話をすることで、植物の特性について学びを深め、地域の理解や故郷への愛着を育む活動に繋げていきたいと考えています。

今から4年前に、歴史民俗資料館の公園に植樹した菊桜は、日ごろから会員の方が水やり、草取りや予防などのお世話をしてくださっているお陰で、今年も美しく雅な花を咲かせ、多くの人を楽しませてくれると思います。佐藤清明資料保存会の活動も菊桜の成長と合わせて、今後も発展を目指してまいりますので、皆様方のご理解ご協力をよろしくお願いいたします。

妖怪を描く — 佐藤清明の“記載論文”をビジュアル化する

越山 洋三

私が「佐藤清明」の名を初めて聞いたのは、令和2年10月25日、倉敷市立自然史博物館3階の特別展示室と記憶している。その日は「特別陳列 野鳥の色鉛筆画と剥製のコラボ展」が3週間の会期を終えた当日で、私が講師を務める岡山動物画の会で制作した野鳥画作品の搬出日であった。40点ほどの展示作品をあらかじめ箱に詰め終わり、一息つきながらこの企画を主導していただいた学芸員の江田伸司さんと立ち話をしていたときのこと。「まだ構想の段階なんですが」という控えめな枕詞に続き、「妖怪」という凡そ令和の自然科学とは対極にあるパワーワードが飛び出してきたのである。興味津々で話の続きを促すと、江田さんの義祖父が佐藤清明その人で、戦前に行っていた妖怪研究の業績を妖怪展という形で世に出すことができるかもしれない、という驚嘆の内容であった。そしてもう一人のキーパーソン、民俗学者の木下浩さんが、最近になって佐藤清明の業績を掘り起こしたのが契機となったことについてもお聞きし、ほぼ野生動物だけを相手に日々を過ごしている私には到底及びもつかない、地域文化の鼓動を感じたのであった。

しかし考えてみれば、この時は妖怪という言葉聞いた場所と発した人物に意外性があっただけで、私にとって妖怪は子供の頃に慣れ親しんだサブカルチャーであった。実際私の本棚には、昭和56年発行の水木しげる著『妖怪100物語（第8刷）』と『妖怪なんでも入門（第23刷）』（小学館）が並んでおり、掲載されている妖怪の名前と絵は今でも全て記憶している。また、残念ながら蔵書はないが、当時雑誌媒体でよく見かけた石原豪人の妖怪画は、コミカルな水木の画風とは異なり、怪奇で妖艶な生々しいイメージが半ばトラウマとなって私の右脳に根ざしている。昭和後期の子供達にとって妖怪は、ウルトラ怪獣や仮面ライダー怪人とは一線を画した、創作と現実のはざまに揺れる出会ってしまうかもしれないクリーチャーだった。令和3年6月16日、私はその妖怪に、今度は民俗学のフィルターを通してもう一度向き合う機会を得た。江田さんから、妖怪「スネコスリ」のイラストの制作依頼が届いたのである。

私に求められているのは、こういうことだった。木下さんの研究成果である『岡山の妖怪辞典— 妖怪編—』（平成26年発行）および同『— 鬼・天狗・河童編—』（平成27年発行、日本文教出版）を基軸に、博物館で「倉敷動物妖怪展」を企画している。いくつかの妖怪をイラストで紹介したいと考えているが、中でもスネコスリは初出が昭和10年発行の佐藤清明著『現行全国妖怪辞典』^{注1}であり、かつ、岡山以外には伝承のない固有種^{注2}なので、ぜひとも大きく取り上げたい。ついては、スネコスリの形態を見直したい。というのも、世の中に流布しているスネコスリの姿が、伝承と食い違っているからだ。民俗学の手法に則るならば、伝承の一字一句を尊重し、そこから逸脱した解釈は慎むべきである。このような文脈上にあるスネコスリのイラストを描いて欲しい。

“世の中に流布している”創作物というのは、全てではないにしろ、興行や出版などで商業的に成功したものであろうから、資本主義の誘惑（あるいは民意）に囚われて変容させられたとしても無理のないところである。例えば、トヨタレクサスの形態というのは、大規模な市場調査を元に売れるデザインを作った資本主義の塊のようなものだろう（誤解のないよう念の為断っておくが、このことに善悪はない）。これに対し、私が普段描いている野生動物、例えばトノサマガエル（学名 *Pelophylax nigromaculatus* (Hallowell, 1861)、カエル目アカガエル科）の形態は、資本主義ばかりでなく、共産主義の影響も、

仏教や神道の影響さえ受けていない。そう考えていくと、江田さんの依頼に応えるには、妖怪をデザインするのではなく、“妖怪は実在する”という前提に立ってその姿を希求すれば良い、ということは直感的にすぐわかった。具体的には、佐藤清明の『現行全国妖怪辞典』を“記載論文”として読めば良い。

一般の方には馴染みの薄い記載論文なるものについては、少々説明が必要だろう。私は野生動物の調査を生業のひとつとしているので、ほぼ毎年数千個体の昆虫を採集して数百種の名前を調べる。種の同定作業にあたっては、初手では市販の図鑑を使用するが、実は時々、図鑑の種名は間違っている。間違っているとわかる、ということは、正しい種名の書いてある別の文献が存在する、ということである。その究極の文献こそが“記載論文”である。記載論文とは、ある生物種を新種として命名した時に、その種の形態的特徴をつまびらかにした論文で、名前のある全ての生き物について存在する。これを見れば図鑑の間違いを正せるし、図鑑に載っていない種も名前を調べられる^{注3}。この構図になぞらえて、伝承を記載論文とし、世の中に流布している妖怪の姿を図鑑の絵と看做せば、依頼に沿ったスネコスリの姿を描き出せるかも知れない。

ただし、残念ながら妖怪には“タイプ標本”がない。タイプ標本とは、記載論文の著者が、これこそがその生き物だ！と紐づけた標本で^{注4}、世界のどこかの博物館に大切に収蔵されている^{注5}。絵を描くために必要な情報は、突き詰めれば「外形（フォルム）」と「表面構造（テクスチャ）」だ。タイプ標本があれば検視によってそれらを明らかにすることができるので、その妖怪の生時の姿を再現するハードルはだいぶ下がるのだが、そうは問屋が卸してくれないというわけだ^{注6}。ならば、「蓋然性」を道具に伝承を読み解いてみよう。伝承には妖怪の細部にわたる形態の記述はないことが多いが、動きや鳴き声、活動時間帯など、生態学的情報が入っていることもある。同じような生態を持つ動物をもとに推測できる器官ごとの形態もあるだろう。この工程には、木下さんの『岡山の妖怪辞典』がレビュー論文^{注7}として大いに役立つはずである。そこまでしてもなお伝承だけでは情報量が足りなく、どうしても蓋然性から描画できない部分については、誠に、誠に遺憾ながら、自然物に対する人間の身勝手な解釈の元凶たりうる「想像力」を最低限の範囲内で行使せざるを得ない。この点については、実在の妖怪たちに平身低頭許しを請おう。

このような基本方針を固めたうえで、“妖怪はどのように発生するのか”、“同じ妖怪でも伝承ごとに形態が少しずつ異なるのはなぜか”、“近年は妖怪の出現がほとんどないのはなぜか”、“生命現象としての妖怪の状態はいかなるものか”、“各種妖怪の出現場所と自然環境との関連”など、妖怪全般に共通の事象をできるだけ統一的に説明できる仮説を紡いだ。この仮説について書き始めると、私が一方的に持論を展開する様相となり、読者の皆様に苦痛を与えかねないのでここでは慎ませていただくが、仮説の先にあるビジュアル化の手法については、「妖怪は実在する！ー スネコスリを描く」（2022年発行、倉敷市立自然史博物館第31回特別展図録『倉敷動物妖怪展 at 自然史博物館』、p. 65-67）に記したので、興味のある方はご参照いただきたい（この図録は発行部数が少なく、すでに入手困難のため、倉敷市立自然史博物館の許可を得て該当部分を本稿に続けて転載する）。最後に、拙作イラスト6点を「岡山の妖怪図鑑」として掲載し、本稿の締めとさせていただきます。

注1：佐藤清明資料保存会 編『佐藤清明の世界』（2022年発行、日本文教出版）に附録として掲載。

注2：生物学用語で、特定の地域にしか自然分布しない生物種。

注3：であれば、記載論文だけ見れば良いだろうと考えるのは早計である。記載論文の難点は、300

年ほど前から現在に至る期間に出版された世界中の学術誌に散らばって、膨大な分量が存在することである。ちなみに現時点で記載された生物は 150 万種で、近年は毎年 1 万種の新種が追加されている。インターネットの発達により記載論文はかなり入手しやすくなったが、よく編纂された図鑑の実用的な価値は計り知れない。

注 4：記載論文で指定された種やその他の分類群の基準となるものをタイプと言い、動物の場合は標本、植物の場合は標本または図や写真、原生生物の場合は培養株である。

注 5：博物館以外にも、大学の研究室や個人所蔵のものもあるほか、戦争や災害等で消失してしまったままのものもある。まだ生きていた鳥をタイプ標本として指定し、その後鳥が逃げてタイプ標本が失われてしまった事例もある。タイプが失われた場合、新たに別の標本を“ネオタイプ”として指定できる手続きもある。

注 6：ごく稀に、妖怪の標本が保存されていることがある。佐藤清明の遺した写真から発見された円珠院の人魚のミイラは、まさにその一例。

注 7：特定のテーマに関する研究論文などの概要や評価をまとめて記述した論文。先行研究の知見がまとめられている。

参考文献

馬場 友希・福田 宏 編 (2022) 新種発見！ 見つけて、調べて、名付ける方法. 山と溪谷社.
 渡辺靖夫・越山洋三・先崎啓究・伊関文隆 (2017) フィールドガイド日本の猛禽類 vol.04 ノスリ. フィールドデータ.

…… (参考) 「岡山の妖怪図鑑」キャプション……

人魚

一人魚干物 壹箱

右人魚元文年自土物之海
 於瀬田より時人々男たよ
 知れ併音代魚ありて大阪
 持り行販賣せり先代購ひ
 末の自末重代此家寶秘藏
 廿一物今貴殿へ賣渡當家
 子傳由緒詳書て之を與ふ
 明治廿五年十月 福山
 小島直叙

小森豊次郎殿

馬の首の妖怪で
村はずれの
寂しい小道や
神社の木から
ぶらぶらがる

川や海に出る水陸両棲の怪物
面は虎に似て嘴が尖り
身に鱗甲がある
四五歳の雛形をしており
頭上に凹みがあつて
少量の水が入っている

水遊びをする子供を
水中に引き込み
肛門から毒を入れ
内臓を引き出して
食へるという

すねこすり
犬の形をして雨の降る晩に
通行人の股間をすりて通る
暗闇に紛れて子供や老人の
脛や足首を引っ張り
転倒させるものは
すねこすりといふ

すいとん
一本定で何処からともなく
すいとん飛んで来て
知らぬ間にそばに立っている
人語を離し心を見透かす
人間を引き裂いて喰つという

くだん
人の顔半の体の人面獣で
件と書く
牛から生まれてすぐ
凶作疫病散などを
予言して死ぬ
件の予言は絶対当たる

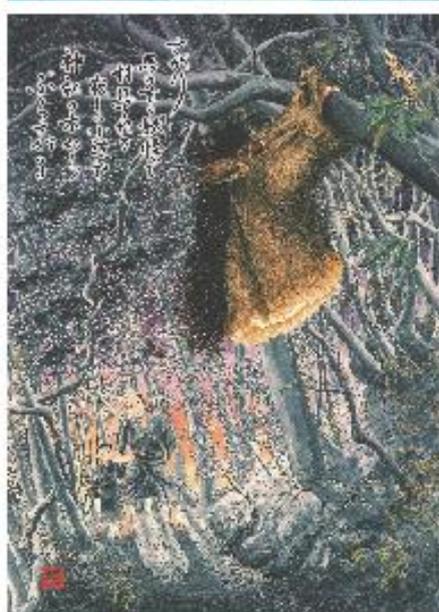
人魚:円珠院所蔵人魚付属文書 (画像:高橋達雄氏)

岡山の妖怪図鑑

人魚



さがり



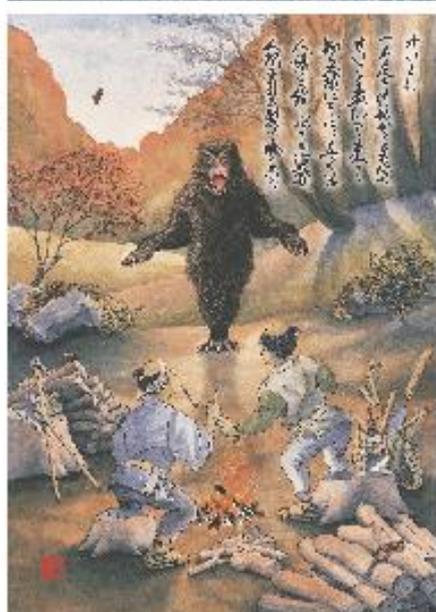
こんご



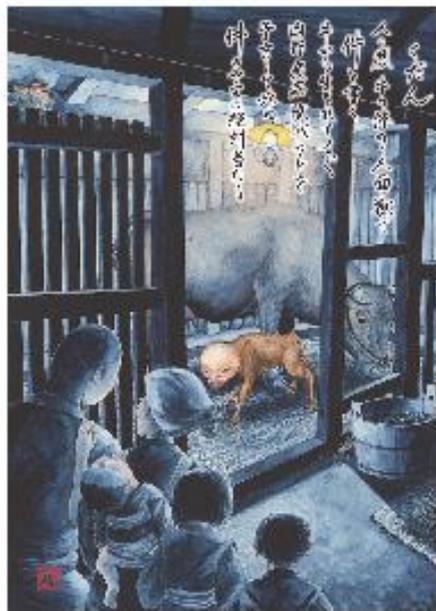
すねこすり



すいとん



くだん



妖怪は実在する！—スネコスリを描く

野生動物画家 越山洋三

妖怪は実在する。まずはこのことを受け入れたうえで、拙文を読んで欲しい。どうにも受け入れられないというのであれば、妖怪は実在するという“設定を諒解する”、ということでも構わない。理由は極めて私的なことで恐縮だが、私が妖怪を描くために必要不可欠な前提だからである。読み進むうちに「あれ？なんかこいつおかしいこと言ってるな」と思うようなことが万一あったなら、妖怪は実在するという現実（あるいは設定）に立ち戻っていただきたい。

さて、妖怪の生態画を描くためには、まず妖怪本体がどのような物理法則に従うのかを確かめておく必要がある。もし妖怪が、例えば地球の重力に関係なく動き回るのであれば、地上に立つ絵さえ安易に描くことがはばかられてしまう。スネコスリを例にその行動を伝承から検証してみると、本種は道を走り、人の足に触れたり足を引っ張ったりし、姿を目撃されている。他の動物妖怪の伝承もだいたい似たようなもので、飛んだり跳ねたり泳いだりする。ニンギョに至っては標本が存在し、私も実際に手で触れてみた。そこには物体としてのニンギョの死体が確かにあった。つまり妖怪は、鳥や獣を描く時のように、ニュートン力学程度をクリアした形で背景の中に配置してしまっただけで差し支えないようだ。宙に浮いてただよったり、壁をすり抜けたり、向こう側の景色が透けて見えながら「うらめしや」と音声を発する幽霊だとそう単純ではないだろう。相対性理論や量子論まで動員する必要があるかも知れない。

妖怪の姿形を描くには、理想的には捕獲された生体、あるいは野外での目撃、せめて誰かの撮った写真が欲しいところであるがなかなか叶うものではない。ニンギョのように標本があればかなり正確に生存中の様子を再現できるが、レアケースだ。本種の標本については倉敷芸術科学大学の研究チームにより X 線 CT によるデジタル 3D 化まで行うことができたので、目視による観察だけでは把握しにくい顎の骨や歯の形状、鰭の条数なども明らかになった。その結果、このニンギョは肉食性で、胸から尾まではニベ科の魚類に酷似しており、残りの腕、肩、および首から頬にかけては、フグ目で見られるような撒き菱型の細かい鱗で覆われていることがわかった。描画には十分な情報量である。

一方、スネコスリを含め、ほとんどの妖怪の情報は言葉による伝承しかない。したがって、それらの内容を総合的に検討し可能な限り蓋然性の高い姿形を描くことになる。幸い岡山の妖怪については、純度の高い伝承が木下浩 編著『岡山の妖怪事典 — 妖怪編』（日本文教出版）に示されている。本書によれば、スネコスリの姿形に言及した伝承は 1 件しかなく、曰く「犬の形をして」いる。この言い回しはやや奇妙で、もしスネコスリが当時日本で知られていた犬種とほぼ同形なら、「犬の妖怪」という伝承が残りそうである。わざわざ「～の形」という表現にしたのは、「猫や狸や鼬ではなく、強いて言えば犬だが、どこかしら違和感のある姿だった」ことを表しているように思われる。スネコスリの行動については 7 件の伝承がある。行間も含めて解釈すると、雨の夜、人気のない道を歩く人の足の間を後ろから前へ駆け抜け、その時体毛が遭遇者の脛や股間をこする、というのが本種の習性である。スラローム走行で左右の足をかわしつつ前方の闇の中へ走り去るスネコスリが目に見えぬ。このような俊敏で繊細な芸当は犬には物理的に不可能で、遭遇者は脛をこすられるどころか膝裏あたりに激突されてつんのめってしまう。

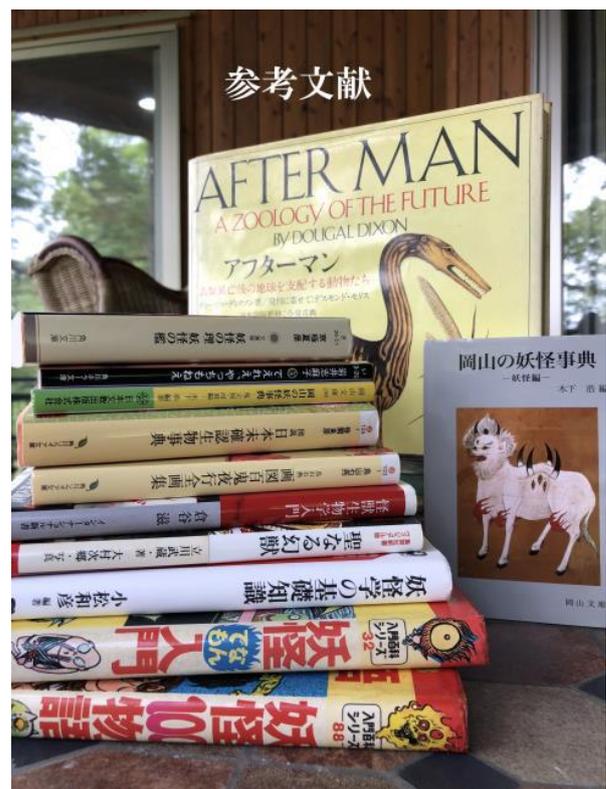
逆に考えれば、スネコスリの体幅は犬に比べ狭く、体毛が遭遇者の脛に“触れる”のではなく“こする”と感じられる程度には体長が長く、体高は人の脛のレンジにあるはずだ（ただし、スネコスリ出没当時の日本人の体格・体型を考慮する必要がある）。人の脛と股間の地上高の差を考えると、股間をこするのは長い尾の役割となるだろう。ただし、尾が長すぎると全体像が「犬の形」の印象から外れていってしまうので、“やや長い”程度に抑えられているだろう。そして、跳ねるように走ったときのみ立てた尾の先端が遭遇者の股間に届く、ということであれば伝承と整合する。夜目が効くことから、夜行性哺乳類のように網膜の後ろに輝板という光をはね返す組織が備わっていると考えられる。瞳に入ったわずかな光さえ反射して、目はよく光るに違いない。

最後に、妖怪生態画の背景について言及したい。妖怪は、出没した場所と時代が特定できる存在である。例えばスネコスリが出現した場所のひとつは、現在の JR 井原駅に近い井領堂前で、その座標は北緯 34 度 35 分 43 秒、東経 133 度 28 分 06 秒、時代は江戸から明治初期にかけてである。このことは、あるひとつの極めて重要な妖怪の真実に帰結する。すなわち、妖怪が目撃者の前に出現した時、同時にその妖怪は、その場所その時代に特有な生物多様性の中に立った、ということになるのだ。地球は、名前がついている現生種だけでも 121 万種の動物（うち 93 万種は昆虫）と 28 万種の植物など生物に埋め尽くされた命の惑星である。したがって妖怪の周辺には、その場所その時代に生息していた動植物を科学的知見に基づいて選定し、ちりばめてしかるべきなのである。これは、ヴェロキラプトルや宇喜多直家の生態画を描く場合にも言えることだ。もちろん、表現方法としては妖怪を架空の心象風景の中に描く構成もありうるだろう。しかし私には、心象風景の中に立つ妖怪、というのはどうもしっくりこない。なぜなら、妖怪は実在する！のだから。

謝辞

妖怪画を描くにあたり、以下の方々と妖怪の形態について議論を交わし、背景に描き込む動植物とその生息環境に関する知識を恵与いただきました。この場を借りて心より感謝申し上げます。

木下浩学芸員（長島愛生園歴史館）
江田伸司学芸員（倉敷市立自然史博物館）
狩山俊悟学芸員（倉敷市立自然史博物館）
岡本泰典氏（倉敷市立自然史博物館友の会）
加藤敬史教授（倉敷芸術科学大学）
武光浩史准教授（倉敷芸術科学大学）
山野ひとみ准教授（倉敷芸術科学大学）
福田宏准教授（岡山大学）



岡山大学構内‘菊桜’の新しい看板設置と‘菊桜’について

徳山 容

2022年11月27日（日）13時から、岡山大学本部棟前庭にある旧看板（写真1）を取り外し、別の場所に新しい看板（写真2）を設置するイベントを行った。参加者は菊桜保存会のメンバー9名、教育学部の学生4名、教授1名、薬学部准教授1名、大学本部職員2名、看板設置業者2名、山陽新聞社記者の20名が参加した。

設置前に私が保存会のメンバー以外の方に‘菊桜’について写真パネルで紹介しながら説明させていただいた。午前中は保存会メンバー7名が除草や施肥作業等を行い‘菊桜’の育成作業（写真3）を行った。

岡山大学に‘菊桜’が植樹されたいきさつは難波早苗が「岡山の権の木と菊桜」という演題で講演したものが『岡山の自然と文化』11、岡山県郷土文化財団（1992）に次のように収録されている。

（前略）かつて、山陽新聞社が岡山県百科事典（佐藤清明が菊桜の項で記述）を出したことがあります。その百科事典のことで山陽新聞社でいろいろ話をしていいたときに、たまたまキクザクラの話が出まして、六高との関係をお話したところ、岡大の先生が岡大にもキクザクラが欲しいということになり、佐藤先生のところの苗をもらって、昭和54年（1979）3月17日に岡大農学部北側の入口に植えたわけです。（後略）

‘菊桜’は1979年（昭和54年）に植樹されたのだが、この年は岡山大学創立30周年にあたり、上記のような経緯で岡山大学の関係者が難波早苗の口利きで佐藤清明が植樹したものと思われる。

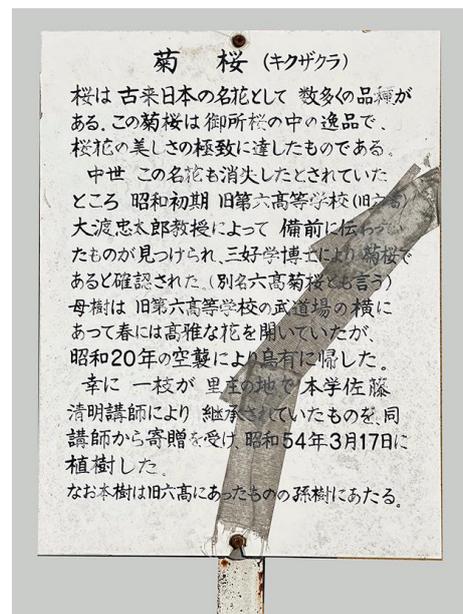


写真1 旧看板

佐藤清明は1958年（昭和33年）から岡山大学農学部講師（現在の非常勤講師）として教鞭を執っている。旧看板はその際に設置されたようである。その事について佐藤公康が次のように記している。

（前略）また、岡山大学農学部前にも植樹され、現在は岡山大学創立30周年に植えられたものが大学本部正門横に、昭和54年設置の看板と共に立つが、爾後の地面整備が進むに



‘菊桜’

きくざくら

学名: *Cerasus*
Sato-zakura Group
‘*Chrysanthemoides*’
Miyoshi

別名: 六高菊桜

菊桜は4月中旬から5月上旬にかけて咲く、花弁数が100～300枚にもなる菊咲きの桜である。

明治40年（1907）岡山大学の前身の一つ第六高等学校大渡忠太郎教授が校庭で植樹して、その桜を東京帝国大学三好学博士に送り、大正5年（1916）に‘菊桜’と命名され発表された。

母樹は岡山空襲により烏有に帰したが、その前年の昭和19年（1944）戦時から守るため同校助手だった佐藤清明氏（後岡山大学農学部准教授）が一枝を里庄町の生家で接ぎ木し継承していた。戦後、この樹を元で作られた苗が皇居や岡山後楽園など縁のある場所に植えられ、昭和54年（1979）に岡山大学へ植樹された。

令和4年（2022）11月

つれ樹勢が衰えているのが残念である。(後略)(佐藤清明資料保存会(仮称)会報創刊準備号「六高菊桜について」佐藤清明先生ご嫡男 佐藤公康氏 平成12年稿より)

現在の位置(岡山大学本部棟前庭)に‘菊桜と看板が移植、移動された時期は分からない。よくあることだが、環境整備のため施設の一部を建て替えたり、増改築する際に樹木等が伐採されることがよくある。時間経過の中で事情を知る関係者がいなくなると設計計画優先で行われる。ところが、約40年余り、‘菊桜’は岡山大学で生き残ったのである。おそらく、大学関係者の中に‘菊桜’を守って下さった方がいたからであろう。

5年前(2017年3月)菊桜育成保存会が発足し、メンバーが初めて‘菊桜’を訪れた



写真4 枯死寸前の‘菊桜’ 2017.3.18

時は主木は全て枯れており、わずかに下の方の幹から数本の生きている枝が残っているだけで枯死寸前(写真4)と言ってよいほど、弱っていたそうである。(生宗脩一氏の報告書)翌年から樹木医の力を借りながら保存会メンバーが育成、回復作業を行い、樹勢を取り戻しつつある。(写真5)



写真5 樹勢を取り戻す‘菊桜’ 2021.4.20



写真3 草取り作業



写真6 新しい看板と‘菊桜’

私が初めてこの‘菊桜’を見たのは2021年4月20日であった。実は2009年12月、岡山大学本部棟前の庭園でアートイベント・岡山デザインウィーク2009「布クロス布プロジェクト」(2010年、文化庁「地域文化芸術振興プラン」あつ晴れ!おかやま国文祭応援事業の関連イベント)を行うために、その当時勤務していた大学の学生や同僚と訪れて作品製作・展示を行った場所だった。その時と同じ前庭に‘菊桜’があったことに驚いた。イベントを行ったのは北側が中心で、‘菊桜’は南側の南端にあり、12月で葉を落としていたためか(もちろん‘菊桜’という桜は全然知らないのだが)全く気づかなかった

今回、新しい看板に取り替える計画は3年前に始まった。文案を理事の稲田多佳子さんに考えていただき、それを土台に、みなさんに検討いただき新文案が完成した。



写真7 岡山大学の学生たちと

偶然にも 2009 年にアートイベントを一緒に行った当時の同僚が現在、岡山大学教育学部教授となっていて無理をお願いして学生達に参加を呼びかけたところ、看板設置イベントには 4 名の学生と教授が参加して下さった。清明さんと昭和天皇との奇縁ほどではないが、少なからぬ因縁を感じている。

2021 年に初めて岡山大学の‘菊桜’を見たとき、驚いたというか、こんな‘菊桜’もあるのかと思いながらシャッターを切った。樹のある部分の花は真っ白で、逆光で見ると透き通るような白さで誠に美しかった。私も不勉強で菊桜の特徴についての知識が十分ではなかったので、こんな花もあるのかと、その美しさに惹かれて何枚もシャッターを切った次第である。今、その時の写真を見ると‘菊桜’の特徴である段咲きではなく、花卉数も数十枚と少なく、さらに雄しべが露出していて、いわゆる‘菊桜’の特徴を全く持たない別な花のような姿である（写真9）。他の場所（部分）の‘菊桜’も段咲きのようではあるが、十分ではなく、雄しべは見え隠れしており、花の中心部はやや濃い淡紅色である（写真8）。

菊桜育成保存会会員の育成活動により、樹勢は徐々に回復している。花の姿も色も回復するにつれて変わっていくものと思っている。今年の春はさらに元気になり、‘菊桜’らしい‘菊桜’となり、その優雅な花の姿が道行く人の目に留まり、新しい看板と共に見ていただけることを願っている。



写真8 淡紅色をした‘菊桜’（左）と真っ白な‘菊桜’（右）



写真9 雄しべが露出した真っ白な‘菊桜’

看板取付作業を具体化する中でコロナ禍による大学構内への立ち入りが困難な状況が生まれ、延期せざるを得なかった。そういった状況が続く中で、福武教育文化振興財団より補助金を受けることが決まり、看板設置費用を捻出することができた。振興財団の方から若者の参加も積極的に勧めて欲しいというアドバイスもあり、看板設置についても当然、岡山大学の若い学生さん達の参加が必然となった。

児童生徒対象冊子「佐藤清明ゆかりの『菊桜』」の概要

次代を担う子どもたちに菊桜のことを知って欲しいという願いを込めて、小学校高学年を対象に、平易な文章で確かな情報を盛り込んだ冊子を作成しました。一部を抜粋して紹介いたします。



もくじ		
1章	『菊桜』のヒミツ	02
2章	せいめいさんと『菊桜』	06
3章	岡山の『菊桜』	11
	佐藤清明生家	12
	里庄町歴史民俗資料館	14
	貞利家	15
	高岡神社	16
	岡山後楽園	17
	岡山朝日高等学校 六高記念館	18
	岡山大学	19
	原田家 三徳園	20
	後楽園前バス停そば たけべの森公園	21
	材木育種センター関西育種場	21
	浅野家	22
	高梁城南高等学校 高梁中央公園	23
4章	菊桜育成保存会の活動	24
番外	鳥取県に『菊桜』があるの？	26
	岡山の菊桜マップ	27
	用語解説 参考文献リスト	28
	おわりに	29

P.1

はじめに ～文化の薫る町を自指して～

博物学者である佐藤清明は1998年に93才で故郷である里庄町で没しています。没後19年が過ぎた2017年に里庄町立図書館での「里庄町のせいめいさん展」妖怪講座の開催を機に、2018年に氏の業績を顕彰するため「清明研究会」が発足し、活動を続けています。氏は生涯を通じて「方言」「妖怪」「植物」等、多岐にわたる研究成果を残しています。私たちは、その残された資料を研究していく中で、自然や文化の歩みと保存の大切さを再認識しています。

『菊桜』は氏がその植物のもつ魅力にひかれ、大切に育ててきた桜の一種です。この本を読まれた皆さんが、『菊桜』の特徴や植樹の背景を知る中で、生物の多様性や「縁」を感じてもらえることを望んでいます。

里庄町長 加藤 泰久

内容：児童生徒向け啓発冊子

A4版 30ページ・1400部発行

配布先：町内小学校 5,6年児童

町内中学校 全生徒

県内公立図書館

関係機関

保存会関係先等

執筆者（掲載順）

加藤 泰久

小野 礼子

徳山 容

大森 悠平

藤井 成加

西崎 康男

佐藤 健治

高橋 達雄

生宗 脩一

土岐 隆信

稲田多佳子

江田 伸司

1章 '菊桜' のヒミツ

担当：小野礼子、横山智

「菊桜」という花を知っていますか？「菊」？「桜」？どっち？という人もい
 るでしょう。正解は「桜」です。でも、どこにでもある普通の桜ではありません。
 非常に変わっためずらしい桜です。この「菊桜」をどうして残していかなければ
 ならないかを皆さんに知ってもらいたくてこの本を作りました。読み終える頃
 は「菊桜大好き」と思ってくれたら、うれしいです。

1章では、「桜のプリンセス 菊桜」のヒミツを紹介していきます。

1章 '菊桜' のヒミツ

桜のプリンセス '菊桜' のヒミツ ① 見た目がきれいでかわいい

花びらがいっぱいだよ。
 ちなみに時期や場所、花
 がつく位置によって花び
 らの枚数が変わるよ！



「菊桜」には、人をひきつけて離さな
 い強い魅力があります。まずは「見
 た目」です。日本で一番多い桜「染井
 吉野」は、花びらが5枚です。それに
 対し「菊桜」の花びらは100枚～300
 枚くらいです。たくさん
 の花びらが、ぎゅうぎゅう詰
 めになっている「花びら
 のポンポン」のような可憐
 な姿は、まさに「桜のプリ
 ンセス」です。



2章 せいめいさんと '菊桜'

担当：大森 悠平



※1・・・六高の跡地は、現在岡山県立岡山朝日高等学校となっている。

6

3章 岡山の '菊桜'

もともと日本に生えていた野生種の桜をもとに、人が新しく作りだして増やした桜を
 「栽培品種」といいます。「菊桜」は栽培品種のひとつです。主に「接ぎ木」という方法によっ
 て増やしています。なぜなら、種から育てると親木と違う花が咲きますが、接ぎ木で増やせば
 元の木と同じ分身（クローン）をつくれるからです。この増やし方によって、佐藤清明が
 守った「菊桜」を、現在でも当時と変わらない様子で見ることが出来ます。

3章では「接ぎ木」をキーワードに、岡山県各地でどのように菊桜が育成されているのか
 を紹介します※！

'菊桜' の増やし方

接ぎ木

芽のついた「菊桜」の枝を、根元近くで切ったオシマザクラの台木に
 つないで育てる方法

- 1 1月～2月に2芽ほど
 ついた「菊桜」の枝を取
 り、保冷庫に保存する
- 2 2月下旬、「菊桜」の枝に
 ミツバチの口をつけ、
 根に近いほうの端を切る
- 3 根元近くで切った台木
 （オシマザクラ）に切
 り込みを入れる
- 4 「菊桜」の枝を台木に差し
 込み、テープで結びボリ
 袋をかける

○2016年から現在（2023年）に至るまで、樹木医の堀野健美さんによって接ぎ木されて増殖しています。
 ○高梁城南高等学校では事務補助員の杉山麗さんによって「取り木」(p28) という方法で「菊桜」が増やされています。

※送客者の菊桜は、佐藤清明が生命をつないだ「菊桜」と同じ分身ではありません。高梁城南高等学校、高梁中央公園に
 関しては、同じ分身かどうか分かっていません。

4章 菊桜育成保存会の活動

担当：小野礼子

貴重な「菊桜」を守ろう！という
 みんなの強い気持ちからはじまった！

活動内容

- ワークショップ
- '菊桜'の開花調査
- 樹木の世話
- 害虫駆除
- のぼりの設置
- 本や動画でPR

設立 2018年6月
 会の目的 '菊桜'の保存に情熱を傾けた佐藤清明の遺
 志を受け継ぎ、栽培品種を保存し、その歴

岡山の菊桜マップ

佐藤清明が指定や調査に関わった天然記念物の一部も紹介！！

里庄町歴史民俗資料館、高岡神社、岡山大学、三徳園、後楽園前バス停そば、たけべの森公園、高梁中央公園では、実際に近くで見ることができます。後楽園は通常鶴鳴館前庭には入れず、関西育種場は事前届が必要です。それ以外に関しては学校・個人宅・施設の関係上、敷地内には入れません。



高梁中央公園 (p23)
高梁市柿木町 8-3



材木育種センター
関西育種場 (p21)
勝田郡勝央町植月中 1043



浅野家 (p22)
勝田郡奈義町上町川



樹木医の栽培場所 (p11)
久米郡久米南町塩之内



高梁城南高等学校 (p23)
高梁市原田北町 1216-1



たけべの森公園 (p21)
岡山市北区建部町田地子
1571-40



佐藤清明生家 (p12-13)
浅口郡里庄町里見

岡山県立青少年農林文化センター
三徳園 (p20)
岡山市東区竹原 505



里庄町歴史民俗資料館 (p14)
浅口郡里庄町新庄 2405



原田家 (p20)
倉敷市水島



岡山大学 (p19)
岡山市北区津島中 1 丁目 1-1
本部棟前



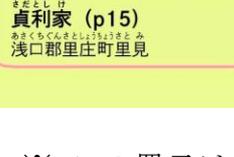
真利家 (p15)
浅口郡里庄町里見



後楽園前バス停そば (p21)
岡山市北区後楽園 1



後楽園 (p17)
岡山市北区後楽園 1-5
鶴鳴館前庭



高岡神社 (p16)
浅口郡里庄町里見 5781



岡山朝日高等学校 (p18)
六高記念館 (p18)
岡山市中区古京町 2 丁目 2-21

※ この冊子は、里庄町立図書館で閲覧できます。(貸出可)
冊子の内容は、里庄町立図書館 Web ページ佐藤清明顕彰特設サイトで公開していますので自由に御覧下さい。
「会報など出版物」のボタンでご覧になれます。



高梁川流域自治体連携事業(里庄町担当事業)

① 動物妖怪展 at 里庄町立図書館

小野 礼子

② 開催期間：2022年10月19日(水)～30日(日)

②会場：里庄町立図書館2階展示室③来場者数：836人

④内容：佐藤清明著の『現行全国妖怪辞典』、浅口市の円珠院に伝わる人魚のミイラの写真、里庄町に伝説がある「雷獣の図」など展示資料27点(展示内容・資料リスト参照)、妖怪切り絵7点を展示しました。

その中の保存会顧問木下浩氏の「岡山の妖怪分布地図」、エルマーの工房製作の見事な妖怪切り絵は、「動物妖怪展 at 里庄町立図書館」で初公開でした。また、越山洋三氏の妖怪画「スネコスリ」「さがり」「人魚のミイラ」「すいとん」「くだん」が会場を彩ってくれました。*妖怪画製作の秘話「越山洋三氏の妖怪を描く— 佐藤清明の“記載論文”をビジュアル化する」会報10号・巻頭論考



⑤ 写真紹介



人魚のミイラ



スネコスリ (越山洋三画)



人魚の切り絵



野狐の高札・人狐弁惑談・和漢三才図会



雷 獣 図



『全国現行全国妖怪辞典』

「動物妖怪展 at 里庄町立図書館」の展示内容と資料リスト

展示パネル・参考資料	展示資料
妖怪とは何か	
妖怪とは何か	
佐藤清明と妖怪辞典	
佐藤清明と『現行全国妖怪辞典』	『現行全国妖怪辞典』（本館蔵）
岡山の妖怪分布地図	
日本三大妖怪	
鬼	
天狗	『和漢三才図会』（複製）
河童	
動物の妖怪たち	
猫（ネコ）	
狸（タヌキ）	
狐（キツネ）	野狐の高札（個人蔵）
怪火（火の玉・狐火）	
狐憑き・憑き物	「人狐弁惑談」（金光図書館）
狼（オオカミ）	木野山様お札(個人蔵)
ハンザキ（オオサンショウウオ）	
雷獣	雷獣の図（赤磐市山陽郷土資料館）
件（クダン）	
岡山オリジナルの妖怪たち	
スイトン	
サガリ	 サガリ
スネコスリ	
岡山の人魚伝説	
人魚	『和漢三才図会』（吉川弘文館 明治39年刊）
里庄町の伝説マップ	

② おはなし会「妖怪の世界～あなたのそばにいる・かも？」

小野 礼子

- ① 開催日時：2022年8月27日(土)14:00～15:00
- ② 会場:里庄町立図書館 2階 視聴覚室
- ③ 参加者：19人

本物のから傘から「かさお化け」が飛び出したり、口裂け女が登場したりちよっぴり怖くて楽しいおはなし会でした。後半は地元の伝説「大なら峠のばけもの」の語り、大型紙しばい「遥照山冷泉記」の読みきかせ、清明さんの『現行全国妖怪辞典』の紹介で幕を閉じました。



から傘小僧が出たあゝ



現代の妖怪がたくさん

倉敷動物妖怪展イベント おはなし会

2022年8月27日(土)14:00開演
里庄町立図書館 2階視聴覚室

妖怪

の世界

～あなたのとなりにいる・かも？

<プログラム>

- ① 読み聞かせ『つくもがみ』(京極夏彦 作, 城芽ハヤト絵/岩城書店)
- ② 紹介 『大接近! 妖怪図鑑』(軽部武宏 作/あかね書房)
- ③ 読み聞かせ『かさじおやぶんいっけんらくちゃく!』
(苅田澄子 作, つちだのぶこ絵/小学館)
- ④ 紹介 『もしものときの妖怪たいさくマニュアル 全3巻』
(村上健司著/山口まさよし絵/汐文社)
- ⑤ 紹介 『大迫力! 日本都市伝説大百科』(西東社)
- ⑥ 読み聞かせ『学校ななふしぎ』(斉藤 洋作, 山本孝絵/偕成社)

休憩(5分)

- ⑦ 里庄の伝説のおはなし「大なら峠のばけもの」
- ⑧ 大型紙しばい「遥照山冷泉記」
- ⑨ 紹介 『現行全国妖怪辞典』(佐藤清明著)



—おわり—

おはなし会 プログラム

③ 特設コーナー

妖怪大集合 ～ あやかしの世界へ ようこそ ～

小野 礼子

- ① 開催日時：2022年8月1日(月)～29日(月)
- ② 場所：里庄町立図書館1階ロビー
- ③ 内容：妖怪の絵本、物語、世界の妖怪、日本の妖怪、民俗学の本などの、
関連本130余冊を展示いたしました。

④ 展示の様子



折り紙の妖怪がお出迎え



鳥山石燕『画図百鬼夜行』も展示



インターンシップの生徒さんのポップもお出迎え（笠岡商業高校生徒）



『ゲゲゲの鬼太郎』のマンガも展示

令和4年度の活動記録

「第1回 清明を読む会」

日時：令和4年6月18(土) 11:10～12:10 日時
場所：里庄町立図書館 2階視聴覚室
講師：才野 基彰氏（佐藤清明資料保存会理事）
内容：① 演奏「歩兵第10聯隊に送る歌」
奏者 宮内千賀子氏
歌手 講師・才野基彰氏



② 講演「岡山歩兵第十聯隊に送る歌」の背景にあるもの
※ この講演のレジメは、会報 No.9 に掲載（講師執筆）

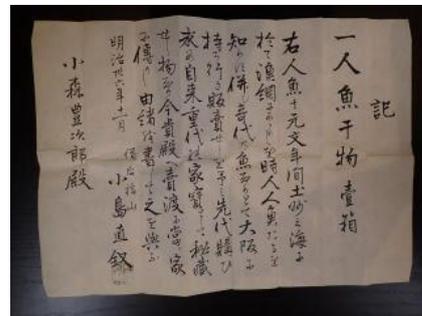
「第2回 清明を読む会」

日時：令和4年9月17(土) 13:30～14:30
場所：里庄町立図書館 2階視聴覚室
講師：佐藤健治氏・高橋達雄氏
・西崎康男氏・藤井成加氏
内容：「佐藤清明ゆかりの『菊桜』」
里庄町内4カ所の今春の開花記録
・里庄町歴史民俗資料館 前庭
・高岡神社
・貞利家
・佐藤清明生家



「第3回 清明を読む会」

日時：令和4年11月19(土) 13:30～14:30
場所：里庄町立図書館 2階視聴覚室
講師：木下 浩氏 佐藤清明資料保存会顧問、岡山民俗学会理事、
岡山大学医学部客員研究員、長島愛生園歴史館学芸員
内容：「岡山に残る人魚のミイラについて～報告と考察～」



この講演会の模様は、の山陽新聞（11月26日）・笠岡放送等で紹介されました。

「第4回 清明を読む会」

日時：令和4年12月17(土) 13:30～14:30
場所：里庄町立図書館 2階視聴覚室

講師：岡本 泰典氏（佐藤清明資料保存会 顧問）

内容：「昭和 28 年の天覧標本 — その正体に迫る — 」



※ 関連論文が、倉敷市立自然史博物館研究報告第 36 号ほかに掲載されています。

「第 5 回 清明を読む会」

日時：令和 5 年 2 月 18 (土) 13:30～14:30

場所：里庄町立図書館 2階視聴覚室

講師：杉井 睦保氏（佐藤清明資料保存会 監査）

内容：「清明の情報収集力」



高梁川流域自治体連携事業：動物妖怪展

事業名：第 31 回特別展 倉敷動物妖怪展 at 自然史博物館

日時：令和 4 年 7 月 16 日(土)～9 月 25 日(日)

場所：倉敷市立自然史博物館

内容：オニ・クダン・カップ・テング・ハンザキ・スネコスリなどの岡山にまつわる妖怪を紹介。話題の人魚のミイラ(浅口市円珠院) の登場。

高梁川流域自治体連携事業：動物妖怪展

展示名：妖怪大集合～あやかしの世界へようこそ～

期間：令和 4 年 8 月 1 日(月)～8 月 29 日(月)

場所：里庄町立図書館 1階 ロビー

内容：妖怪関連本の展示。

高梁川流域自治体連携事業：講演会

演題：博物学者 荒俣宏、妖怪を語る ～この世に存在した … らしい妖怪たち～

日時：令和 4 年 8 月 6 日(土) 14:00～16:00

場所：倉敷市立美術館 講堂

講師：荒俣 宏氏（作家・翻訳家・妖怪研究家）

高梁川流域自治体連携事業：おはなし会

展示名 妖怪の世界 ～ あなたのそばに、いる・かも？

第 1 回：令和 4 年 8 月 20 日 倉敷市立美術館 講堂 14:00～15:00

第 2 回：令和 4 年 8 月 27 日 里庄町立図書館 2階 視聴覚室 14:00～15:00

内容：郷土の伝説の紙しばい、里庄町のミステリー伝説マップ、妖怪の絵本の紹介、妖怪図鑑の紹介など。

高梁川流域自治体連携事業：展示

展示名：動物妖怪展 at 里庄町立図書館
期 間：令和4年10月19日(水)～30日(日)
場 所：里庄町立図書館 2階 展示室
内 容：岡山にまつわる妖怪を紹介。
・オニ・クダン・カップ・テング
・ハンザキ・スネコスリなど、



第6回 里庄のせいめいさん展

期間：令和4年7月1日(金)～8月29日(月)
場所：里庄町立図書館 1階 ロビー
内容：各分科会の一年間の研究の成果を発表。

天然記念物 チーム SEIMEI・21人のサムライによる大事業

植 物 虚空蔵公園の植生観察

民俗学 「歩兵第10聯隊に送る歌」の謎

※ 展示の様子は、会報 No. 9 に掲載。

佐藤清明ゆかりの'菊桜' 写真展

第1期

開催日：10/1(土),10/2(日),10/15(土),16日(日)

時間：9:00～16:00

場所：里庄町歴史民俗資料館 玄関ホール

第2期

開催期間:10/17(月)～10/30(日)

時間：9:00～19:00

場所：里庄町立図書館 1階ロビー



岡山大学本部構内の「菊桜説明パネル」の更新設置

清明資料保存会では、岡山大学本部構内の菊桜（六高由来の 苗を清明が植樹）の樹勢回復に努めてきた。

この度、令和4年11月27日(日)の午後、好天に恵まれる中、岡山大学職員・在学生・保存会会員ほか計20名で、懸案となっていた説明パネルの更新設置を実施した。

(詳細は、本号 P.8-10 参照)



佐藤清明顕彰特設サイト



佐藤清明資料保存会会報 No.10

発行日 令和5年4月20日
発行者 佐藤清明資料保存会・里庄町立図書館
会長 加藤泰久(里庄町長) 館長 高田正信
住 所 719-0301 岡山県浅口郡里庄町里見 2621
電 話 0865-64-6016

ホームページ : <http://www.slnet.town.satosho.okayama.jp>
Eメール : slnet@slnet.town.satosho.okayama.jp